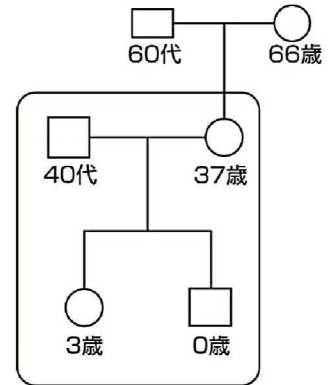


母親が虐待への危惧を語ったケース

—赤ちゃんが生まれてから、上の子が全然可愛くなくなった—

経産婦、第1子の母乳育児支援から関わってきた事例。実家に里帰りし第2子を出産したので、また乳房ケアを受けたいと訪れてきた。母親は「赤ちゃんが生まれてから上の子がちっとも可愛く思えない、このままでは虐待するかもしれない」と語った。母親が語る第1子への感情表現を通して虐待への危惧に気づく。



その方が、「自分は赤ちゃんのお世話をしてるのに、上の子がまとわりついてくるから、もう嫌でしょうがない」って言われてたんですね。生む前はそんなことはなかった、生まれてからその思いが強くて、嫌だと思えば余計に、おっぱいをやってるとか何かをしてる時に、その子がまとわりついてくるから、何ていうか、「煩わしい」というような表現を、ケアの時に言われてました。

1カ月後、100km離れた自宅に帰り、その後、連絡はしばらく途絶えたが、乳腺炎を起こしたため実家に帰り、相談場所を求めてきた。夫はギャンブル好きで、子育てに一切関心がない。実父には、酔っ払って母親と間違っ胸を触られたという高校時代の体験の嫌悪感が原因で、関係は非常に悪くすぐ怒鳴り合いになる。実母は、夫と娘の間に入ってハラハラしている。第1子の子育てを手伝って欲しくても頼めない状況である。精神的疲労や育児負担を尋ねると、やはり第1子のことが出てきた。

今までやれていたトイレや洋服のこともできなくなって、してくれって言う。自分はもう、こんなに大変なのに、なんでそんなことができなくなったのかっていうことにイライラと、それからやっぱり、大声で怒鳴ること、時には殴ってしまうっていうようなことを言われていて。それを虐待と言うか言わないかはあれなんですけども、私としてはとても、その方の心の葛藤が出てきてるなって。こっちには、それぐらいしかおっしゃらないけれども、多分、随分抑えて言ってらっしゃるのではないかなと、私の推測の域なんですけど、そんな感じがかかりを持たせてもらっていて。

授乳期間中は何度か、乳腺炎の症状だけでなく、話をすると落ち着くからといっては会いにきた。その時もやはり第1子のことを話した。

第1子は顔色を伺い馴染まない。こどもらしく笑うとか遊ぶという状態がなく、固まっているような感じであった。何回か会ううちに、やっとニッコリ笑ったり、少し表情は出てきたものの、その硬い表情や、おどおどしている感じから、母親が訴えている言動は日常的と判断できた。10カ月ぐらいの時に「もうこれはダメだ。ほんとにもう虐待してしまう」と訴えた。

「よくそうやって、虐待しそうだっていうことを私に言ってくれましたね」ということから、彼女とまたコンタクトを取るようにして、「とにかくね、一人で全部、赤ちゃんのことも、お姉

ちゃんのことともなっていくととても厳しいから、私は市の保健師さんのほうに、とにかく今そんな状況だということ連絡してもいい？」って言ったら「はい、お願いします」って言われたからですね、自宅の保健所にすぐ連絡票を書いて、こんな状況で、こんな訴えをされてますからっていうことを送って。

自宅のある市保健所に文書で連絡し、見守りを依頼した。第1子は3歳児健診の要チェック事例との回答があり、言語の遅れや身の回りの世話が行き届かないことなどが指摘され「家庭訪問」が実施されていた。訪問時の印象では、母親はとても落ち着いており、虐待している状況には見受けられなかったが、子どもの表情や、保健所でも育児に対する気持ちを同様に訴えており、「あっちこっちに行き、相談される方なんです」と市の保健師の感想があった。第1子の発達の遅れが何から来ているのか、連絡を取り注意して見ていた。母乳育児も落ち着き、産後1年ほどで連絡が途絶え、その後は関わる機会がないので音信不通となった。

それ以来はですね、おっぱいがほとんど落ち着かれたのか、来られなくなったので、その後の経過はわからないんですけど、そうやって、まず本人が訴えてこられ、介入して、私が何かをしたということではないからですね。あくまでもこちらは、来られる時の窓口をつくって相談を受けて、そして、あとは連携してっていう形までしかできてないので、確認は取れてませんが、目の前で虐待をしていることを確認してではないけど、やっぱり本人が「虐待しそうだ」とか「自分は、ある種、虐待かもしれない」ということを言われた言葉が、やっぱり気になってですね。

感想：母親自身が虐待の危惧を述べている。母乳育児を強く希望するなど表面的には育児熱心で問題ない母親とみられがちであるが、育児への適応は確認しないと分からない。母親の発信するメッセージをどのようにつかみ関わって行くかは助産師として日常に求められる実践力である。母乳支援を通して信頼関係が築けたことがSOSの発信に繋がったとも考えられ、虐待予防につながる力量を高める必要性を感じる。

(斉藤)